言語研究（*Gengo Kenkyu*）**150**: 87–115（2016）

南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント

麻生玲子　　小川晋史
東京外国語大学大学院生　　熊本県立大学文学部

【要旨】本稿では，南琉球八重山語波照間方言（以下，波照間方言）の三型アクセント体系について論じる。これまで波照間方言のアクセントは主に二型アクセント体系とされてきたが，近年，三型（Ogawa and Aso 2012，小川・麻生 2015），あるいは四型（松森 2015a）のアクセント体系を持つという報告が相次いだ。本稿では，まず共時的なアクセント体系についての調査結果をもとに，波照間方言が三型アクセント体系を持つと主張する。次に，現在の波照間方言の各アクセント型に所属する語彙には語頭音による偏りが認められるという事実を報告するとともに，白保方言との比較から，そのような偏りが 250 年以上前から存在したであろうという通時的な分析の結果を示す *。

キーワード：琉球諸語，波照間方言，三型アクセント，語声調，tonogenesis

1. はじめに

波照間島（沖縄県八重山郡竹富町波照間）は，日本最南端の有人島である。日本の南西に広がる琉球列島のうち，八重山諸島 [1] に属し，その一番南に位置する。島への交通手段は，石垣島から運行されている高速船とフェリーである。高速船に乗った場合，石垣島の離島ターミナルからはおよそ 1 時間で波照間島に到着する。島の面積は 12.77 平方キロメートル，周囲は 14.8 キロメートルの小さな島で，人口

* 本稿は，2012 年に行われた International Workshop on Corpus Linguistics and Endangered Dialects のポスター発表 “Three-pattern accent system in Hateruma Ryukyuan” および，2015 年に行われた第 29 回日本音声学会全国大会ワークショップ「三型アクセント研究の現在」の「波照間方言の三型アクセント」の内容をもとに加筆・修正を行ったものです。本稿の執筆に当たっては，青井隼人氏，江畑冬生先生，児玉望先生，新永悠人氏，Thomas Pellard 先生，松倉昂平氏，松森晶子先生（五十音順）および 2 名の査読者から的確なアドバイスをいただきました。五十嵐陽介先生，中川奈津子氏からは貴重な資料を提供いただきました。この場を借りて皆様にお礼申し上げます。本研究は，筆頭著者に対する日本学術振興会科学研究費補助金の特別研究員奨励費（課題番号 10J06081），第 2 著者に対する特別研究員奨励費（課題番号 09J00800），筆頭著者及び第 2 著者が研究協力者となった基盤研究（A）「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究（代表：狩俣繁久教授）」（課題番号 24242014），第 2 著者が共同研究員である国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」による助成を受けた研究の成果の一部です。最後に，本稿の調査協力者である田盛吉さんをはじめ，いつも快く調査に応じてくださる波照間島北集落にお住いの鳩間末さん，宮良英子さん，屋良部ヒデさん，石垣島にお住いの前迎スミ（南集落出身）さんに心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

[1] 八重山諸島には，石垣島，竹富島，小浜島，黒島，新城島，西表島，由布島，鳩間島，波照間島，与那国島が属する。石垣島は八重山諸島で最も人口が多く，町の規模が大きい島である。八重山諸島のうち，石垣島は 1 島で石垣市，与那国島は八重山郡与那国町を構成している。他の島々は，八重山郡竹富町に属する。竹富町役場は石垣市にある。

は 521 人（2015 年 3 月末，竹富町町役場調べ[2]）である。島は 5 つの地区（富嘉（ふか），名石（ないし），前，南，北）から成り立っている。

波照間方言は，その波照間島で話されている言葉である。波照間方言は琉球諸語のうち，南琉球の八重山語に属する（ローレンス 2000，Pellard 2015）。八重山語には，島や地域による下位分類があり，波照間方言はその 1 つに数えられる。波照間方言を流暢に使える話者はおよそ 75 歳以上である。このことから，話者人口はおよそ 120 人と推定される[3]。

本稿の目的は，波照間方言のアクセント体系を明らかにすることである。これまで波照間方言のアクセントは主に二型アクセント体系とされてきたが，近年，三型（Ogawa and Aso 2012，小川・麻生 2015），あるいは四型（松森 2015a）のアクセント体系を持つという報告が相次いだ。本稿では三型アクセント体系の立場をとる。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で波照間方言のアクセントに関する先行研究を概観し，3 節で波照間方言の音声および音韻特徴について述べる。4 節では名詞および動詞の共時的なアクセント調査の結果をもとに，波照間方言が三型アクセント体系を持つと主張する。続いて，5 節では複合語と形容詞のアクセントについて，6 節では四型アクセント体系の可能性について述べる。形容詞と一部の複合語は 1 語に対し，例外的に 2 アクセント単位を持つ。これらの例外を四型アクセント体系で示唆されている例と並行的に分析し，本稿では三型アクセント体系の立場を変えないと結論付ける。7 節では，現在の波照間方言の各アクセント型に所属する語彙に語頭音による偏りが認められ，それゆえ語がどのアクセント型をとるのかについて予測性が高いことを述べる。さらに波照間方言と共通の祖方言を持つ白保方言との比較から，そのような偏りが 250 年以上前から存在したであろうという通時的な分析の結果を示す。

本稿で使用するデータのインフォーマントは，北地区に住む田盛吉さん（2015 年現在，76 歳。女性）である。彼女は生まれも育ちも波照間島で，両親，夫ともに波照間島の出身者である。長期にわたる島外への渡航歴はない。

2. アクセントに関する先行研究

波照間方言のアクセントに関する先行研究は，秋永（1960），平山・中本（1964），平山ほか（1967），崎村（1987），平山（1988）および久野（2002）がある[4]。これまで主に二型アクセントとして報告されてきた。表 1 に，先行研究と本研究の立場を比較したものを挙げる。

---

[2] 竹富町 HP より。URL: http://www.town.taketomi.lg.jp/town/index.php?content_id=41［2015 年 11 月アクセス］

[3] 波照間島に在住している方のみの数字である。波照間島以外にも石垣島などに移り住んでいる方もいるためこの数字より大きいことが見込まれる。

[4] この他に，アクセント体系を記したものではないが，波照間方言の多くの語に関して音調を記述した資料として沖縄県教育委員会（1975）が知られている。

表 1　先行研究における 2 拍（2 音節）名詞単独のアクセント型および音調と本研究との比較[5]

先行研究	アクセント型 1	アクセント型 2	アクセント型 3
秋永（1960）	HL	HH	
平山・中本（1964） 平山ほか（1967）	LL	LH	
崎村（1987）	HL	LH，LL	
平山（1988）	LL	LH，HH	LR
久野（2002）	LF，HF，HL，LL	LH，HH	

	下降型	平進型	上昇型
本研究（語単位）	F（HL，HF）	H（HH）	R（LH，LR，FH）

おそらく秋永（1960）が波照間方言のアクセントに関する初めての報告である。その後，平山・中本（1964），平山ほか（1967），崎村（1987）と続く。観察される音調パターンに違いはあるものの[6], 何れも二型アクセント体系であると報告されている。名詞については類別語彙の 1，2 類と 3，4，5 類でアクセント型が区別される。

しかし, 平山（1988）では 2 拍名詞に 3 つのアクセント型を認めている。その他，3 拍名詞で 5 つ[7]，4 拍名詞で 4 つ，動詞に 4 つ，形容詞に 2 つのアクセント型を認めており, 形容詞以外について平山ほか(1967)までの研究とは異なる解釈を示した。

久野（2002）は従来の研究と同様に 2 つのアクセント型を認めている。アクセント型 1 のピッチパターンは 4 つ，アクセント型 2 のピッチパターンは 2 つである。つまり，最終音節が低ピッチで終わればアクセント型 1，高ピッチで終わればアクセント型 2 であると述べた。

以上の先行研究は，1960 年代から 1980 年代の調査結果に基づくものである。平山・中本（1964）は，当時の 50 歳以上の話者が低平型（LL）で発音するところを 20 歳代は頭高（HL）で発音すると報告している。2007 年以降の調査結果からは n ＋ 2 のピッチパターン，すなわち 2 拍名詞に関しては HL，HH，FH，LH の 4 つ，3 拍名詞に関しては HHH，LLH，HLH，HHL，HLL の 5 つの報告がある（麻生 2009, Aso 2010）。少なくとも著者らの調査でも「明らかに LL」というピッチパター

[5] 原文では○（低ピッチ），●（高ピッチ），◐（下降調）◑（上昇調）で表記されている。ここでは，L は Low，H は High，F は Falling，R は Rising のピッチパターンを示す。

[6] 観察される音調パターンの違いの原因については，調査語彙の偏りと島内の方言差が考えられる。まず，波照間方言は帯気が強い故，有声子音で始まる語が無声子音で始まる語に比べ少ない。例えば，秋永（1960）で用いた 2 音節名詞の中心語彙 42 語中，有声子音で始まる語は 8 語であった。本稿の後半（7 節）で指摘する内容を考慮すると，有声子音で始まる語が少ないと上昇型の語のピッチパターン（LH など）が現れる可能性が減る。次に，地理的な理由から，冨嘉とそれ以外の地区で方言差が生じている可能性がある。平山（1988）や久野（2002）では冨嘉出身の話者のデータも用いており，観察される音調パターンの違いの原因とも考えられる。実際，麻生（2015）では冨嘉地区の母音 /ɛ/ について研究を行ったパッパラルド（2012）を受け，北・南地区と冨嘉地区では /ɛ/ の音価が異なることを指摘している。

[7] 3 拍名詞の内，1 つの型は複合語の例しか挙がっていない。実質 3 拍名詞に関しては 4 つの型である可能性がある。

ンをこれまでに確認できていない。

先行研究の多くが波照間方言は二型アクセント体系を持つとして分析してきたのに対し，Ogawa and Aso（2012）および小川・麻生（2015）では三型アクセント体系が主張された。また，松森（2015a）によって四型アクセント体系の可能性が示唆されている。本稿では，表 1 でアクセント型 2 のピッチパターンとされてきた LH と HH（崎村 1987 では LL）を別のアクセント型とし，あくまで三型アクセント体系であるという立場をとる。四型アクセント体系の可能性については，6 節で詳述する。

3. 波照間方言に見られる音声および音韻特徴

本節では，実際のアクセント体系を提示する前に，波照間方言の音声および音韻特徴について概観する。

波照間方言は母音 7 個（/a, e, (ɛ), i, ï [ə~ɨ], o, u/），子音 16 個（/p, b, t [t~tɕ], d [d~ʑ], k, g, f, s [s~ɕ], c [ʦ~tɕ], z [ʣ~z~ʥ~ʑ], h, m, n [n~(n̥ʰ)~ŋ~m][8], r, w, j/）の音素を持ち，音節構造およびモーラは（1）の通りである（麻生 2015）。

（1）　(O　(G))　N　(Co)[9]
　　μ　μ

波照間方言には，以下の音声・音韻特徴がある。

①語頭無声阻害音の帯気が強い。

②帯気した子音に続く母音，さらにはそれに続く子音を無声化する。

③母音の長短，子音の長短の区別が非弁別的であるようだ。

波照間方言の無声子音の帯気の強さは，琉球諸語の中で「もっとも著しい程度に達する」（上村 1992: 793）。帯気した子音に続く母音は無声化し，さらには続く共鳴子音（/m, n, r/）までも無声化する。

（2）　/pama/「浜」　[pʰḁm̥a]

波照間方言は母音と子音の長短の区別が非弁別的であるようで，子音の長短に関するミニマルペアは見つかっていない。母音の長短に関するミニマルペアも，単一の語根からなる語同士の例では見つかっていない。「数詞語根＋類別接辞」の構造を持つ数詞で，1 例見つかっているのみである。

[8] /n/ の異音について，音節構造の Co かつ語末の環境で [ŋ]，O の環境で [n] これら以外の Co あるいは N の環境では，それぞれ後続する子音の調音点で同化し [n~m~ŋ] が実現する。[n̥ʰ] は，「6」を表す数詞でのみ実現する。音節構造については（1）および注 9 を参照のこと。

[9] それぞれ O は Onset，G は Glide，N は Nucleus，Co は Coda を示す。N には母音の他，子音 /n/ が入りうる。

(3)　a.　/micï/　　[mitsɨ]「道」
　　b.　　[mi:tsɨ]「3 つ」

その他の環境では，母音は短母音で実現することもあれば，長母音で実現することもある。以下に疑問詞 /ne/「どう」が短母音と長母音で実現する例を挙げる。

(4)　a.　[nenu pʰa̤n̪asɨ su:kaja:]
　　b.　[ne:nu pʰa̤n̪asɨ su:kaja:]
　　/ne=nu　panasï　su　kaja/[10]
　　どう = の　話　する　かな
　　「どんな話をしようかな。」

4. アクセントの 3 つの型

本節では，波照間方言の名詞および動詞アクセントについて報告する。形容詞に関しては，名詞および動詞とは語構成の違いがあるため，5.2 節で別に論じる。

波照間方言は，早田（1977，1999）のいう「語声調」の言語，つまり各語あるいは文節がどの声調を持っているかということが弁別的な言語であると本稿は考えている。以下では ＼ ˥˩ ／ の 3 つの記号を, Ogawa and Aso (2012) および小川・麻生 (2015) で主張されている 3 つのアクセント型（下降型，平進型，上昇型）を区別するための音韻的記号として用いる。

アクセントを調べた語彙は，名詞に関しては，類別語彙（金田一 1974）および琉球諸語の複数方言におけるアクセント対応が明らかな語（系列別語彙。松森 2010, 五十嵐ほか 2012 を参照）を中心に選んだ 289 語である [11]。動詞および形容詞に関しては，話者が日常会話で用いた語を 20 語ずつ調査した。

調査の結果，少なくとも現在の波照間方言は「語 + アクセントを持たない助詞」（「文節」と呼ぶ）をドメインにした三型アクセント体系を持つことを主張する。アクセント型は，下降型，平進型，上昇型の 3 つである。それぞれ，下降型は「語末に向けて下降する」，平進型は「下降も上昇もしない」，上昇型は「語末に向けて上昇する」という弁別特徴を持つ。分布の内訳は，調査で調べた名詞の内，下降型が 90 語，平進型 131 語，上昇型が 68 語であった。

以下に, これまでに見つかっているミニマルトリプレットを表 2 に示す。その内, 分節音として /zï/ を含む 3 つの語の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを図 1 から図 3 に示す。録音は, インフォーマントに単独で発音してもらう形式で行った。なお，音響分析には Praat（ver. 5.4.21）を用いた。

[10] ハイフン（-）は接辞境界，イコール（=）は接語境界を示す。
[11] 本稿にかかわる調査は，2011 年を中心に調査を行い，2015 年に追加調査を行った。

表 2　波照間方言におけるミニマルトリプレット

音素配列	下降型	平進型	上昇型
/zï/	/zï↘/「血」	/zï˥/「乳」	/zï↗/「地」
/sïsjan/	/sïsjan↘/「知っている」	/sïsjan˥/「切った」	/sïsjan↗/「着た」

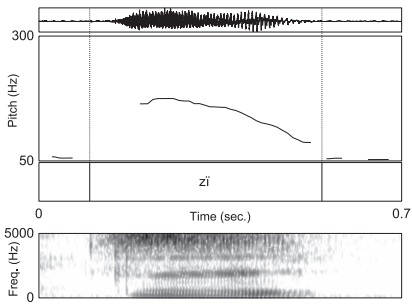

図 1　下降型の /zï/「血」

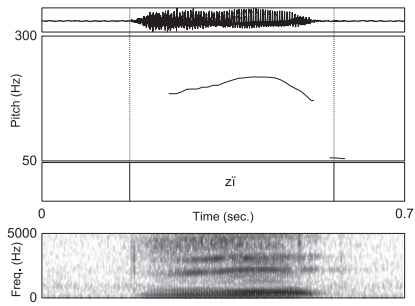

図 2　平進型の /zï/「乳」

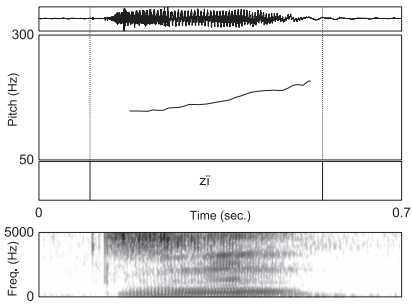

図 3　上昇型の /zï/「土」

4.1. 下降型

下降型アクセントは，ピッチ下降があることが弁別的特徴であり，下降の位置は非弁別的である。この型に属する語のピッチは，語末に向けて下降する。語頭から 2 音節目，あるいは 2 モーラ目のあたりで急激に下降するパターンと，徐々に下降するパターンがあり，下降の位置ははっきりと定まっていない。類別語彙の 1，2 拍名詞の 1，2 類，あるいは系列別語彙の A 系列の名詞の多くがこの型に属する。動詞は，類別語彙で主に 1 類の動詞が属する。以下，特に括弧を付けないアルファベット表記は音素表記である。

名詞には，ki「毛」，po「帆」，pa「葉」，da「2sg」，pucu ～ pucï「臍」，musï「虫」，ari ～ arï「蟻」, pani「羽」, kacï「風」, pïni ～ pïnï「髭」, simi「爪」, pïtu「人」, fa「鞍」, ke「井戸（川に対応）」, kipusï「煙」, sïkara「力」などがある。動詞には, jagun「焼く」, nagun「泣く」，kon「買う」，sïkun「聞く」，sïkon「使う」，hon「食う」などがある。

4.2. 平進型

平進型アクセントは，ピッチが大きく上昇も下降もしないことが弁別的特徴である。この型に属する語のピッチは，高く始まり，その後大きなピッチ変動がない。類別語彙の 1，2 拍名詞の 3，4，5 類，系列別語彙では B 系列および C 系列の名詞がこの型に属する。動詞は，類別語彙で主に 2 類の動詞が属する。

名詞には，ki「木」，fuca「草」，fumon「雲」，imi「夢」，iru「色」，paton「鳩」，katana「包丁」，kangan「鏡」，ami「雨」，aba「油」，fuciri「薬」，aca「明日」などがある。動詞には，kun「来る」，mun「思う」，ucin「落ちる」，hakun「書く」，perun「入る」などがある。

4.3. 上昇型

上昇型アクセントは，語末に向かってピッチ上昇することが弁別的な特徴であり，上昇する位置は非弁別的である。この型に属する語の語頭は低ピッチから始まり，多くは語末音節あるいは語末モーラのみ高ピッチとなるが，語頭から語末にかけての漸次上昇の場合もある。平進型と同様に，類別語彙の 1，2 拍名詞の 3，4，5 類，系列別語彙では B 系列および C 系列の名詞がこの型に属する。動詞は，類別語彙で主に 2 類の動詞が属する。平進型との所属語彙の違いは後述（7 節）する。

名詞には，bata「腹」，nin「根」，maju「眉」，garasï「カラス」，hi「家」，zïn「銭」などがある。動詞には，mirun「見る」，nun「縫う」，jumun「読む」，nirun「こねる」などがある。

一部の語は，語頭位置でピッチが下降し，語末に向けて再び上昇するというパターンを示すことがある。68 語見つかった上昇型の語のうち，13 語がこれにあてはまる。鼻音で始まる語であることが多いのだが，語頭のピッチ下降と相関性があるのかは不明である。このようなパターンになる語は，masu「塩」，nanda「涙」，mami「豆」，minan「貝」，misikurumin「耳」，naubi「あくび」，mimizï「ミミズ」，gucimin ～ gucirumin「脇」などがある。

松森（2015a）では，この下降してから上昇するというピッチパターンを当該アクセント型（本稿でいう上昇型）の重要な特徴として「下降上昇型」と呼んでいる。しかし，本稿では語末にむけての上昇が唯一弁別的であり，語頭の下降は音韻的にはあくまでもオプショナルで非弁別的であると考える。その根拠として，これらの名詞は話者の発音だと高ピッチで始まることが多いものの，低ピッチで始まるトークンも同様に観察されることが挙げられる。図 4 および図 5 に minan「貝」の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを示す。図 4 は語頭に下降がないパターンで，図 5 は語頭に下降があるパターンである。

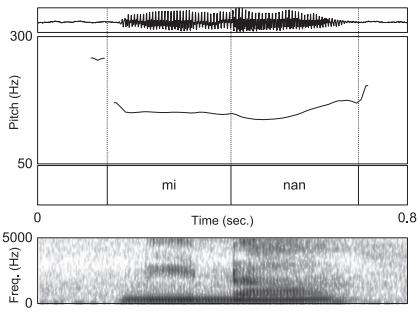

図 4　minan「貝」（語頭に下降なし）

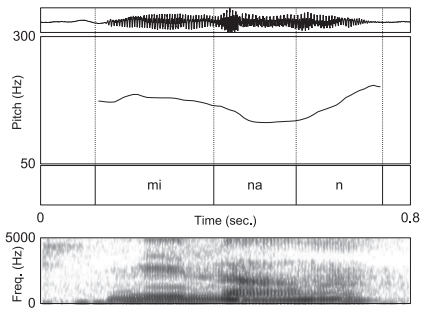

図 5　minan「貝」（語頭に下降あり）

5. 複合名詞および形容詞のアクセント

本節では，波照間方言の複合名詞および形容詞のアクセントについて報告する。複合名詞は基本的に 1 語に 1 つのアクセントを基本とする。しかし，例外的に語の内部要素がそれぞれのアクセント（下降型，平進型，上昇型）を持ち，語全体で 2 つのアクセント単位を持つ例がある。形容詞のアクセントは，このような複合語の例外と並行的に考えられる。つまり, 1 語であるものの, 2 つのアクセント単位を持っている。

5.1. 複合名詞

波照間方言の複合名詞のアクセントは，基本的に前部要素のアクセント型を複合名詞全体に保存する。以下に，想定されるすべての組み合わせ（三型×三型＝ 9 通り）の例を挙げる。

(5)　**下降型＋下降型　→　下降型**
nisi↘「北」　+　kacï↘「風」　→ nisi+kacï↘「北風」

(6)　**下降型＋平進型　→　下降型**
isi↘「石」　+　usï→「臼」　→ isi+usï↘「石臼」

(7)　**下降型＋上昇型　→　下降型**
da↘「あなた」　+　hi↗「家」　→ da+hi↘「あなたの家」

(8)　**平進型＋下降型　→　平進型**
pe→「南」　+　kacï↘「風」　→ pe+kacï→「南風」

(9)　**平進型＋平進型　→　平進型**
ki→「木」　+　usï→「臼」　→ ki+usï→「木臼」

(10)　**平進型＋上昇型　→　平進型**
pinari→「左」　+　pan↗「足」　→ pinari+pan→「左足」

(11)　**上昇型＋下降型　→　上昇型**
jamatu↗「大和」+　pïtu↘「人」　→ jamatu+pïtu↗「大和人」

（12）　**上昇型＋平進型　→　上昇型**

midumu∧「女」＋　uja˥「親」　→ midumu+uja∧「女親」

（13）　**上昇型＋上昇型　→　上昇型**

zï∧「土」　＋　mami∧「豆」　→ zï+mami∧「ピーナッツ」

複合語の中にも，いくつかの語に例外が認められる。各要素のアクセントがそれぞれ保存される場合である。（14）から（16）は，形態統語的には 1 語だが，2 つのアクセント単位を持つ例である。

（14）　**上昇型＋下降型**

a.　misju∧「味噌」　＋　turi∨「鳥」　→ misju∧+duri∨「すずめ」

b.　ba∧「私」　＋　maju∨「猫」　→ ba∧+maju∨「私の猫」[12]

（15）　**平進型＋下降型**

a.　pe˥「南」　＋　mura∨「村」　→ pe˥+mura∨「南村」

b.　pan˥「足」　＋　simi∨「爪」　→ pan˥+simi∨「足の爪」

（16）　**下降型＋下降型**

da∨「あなた」　＋　na ～ nan∨「名」　→ da∨+na∨「あなたの名前」

このような例外の組み合わせでは，後部要素が下降型の例のみ見つかった。

語とアクセント単位が一致しないケースは，前部要素が上昇型の場合についても見つかっている。上昇型のアクセントは，保存される範囲が拡張される場合がある。通常，アクセントの範囲は文節であるが，「上昇型の名詞＋属格助詞 =nu，さらに続く名詞」（つまり 2 文節からなる名詞句）に 1 つのアクセントが保存されることがある。（17）と（18）は，文節は 2 つだが，1 つのアクセント単位にまとまる例である。名詞句末にアクセント記号を記す。

（17）　jamatu=nu muni∧　「大和言葉」　jamatu∧「大和」，muni∧「言葉」

（18）　ba-ima=nu sïma∧　「私たちの島」　ba-ima∧「私たち」，sïma˥「島」

ただし，すべての語にあてはまるわけではない。（19）のように，通常のアクセントの範囲，すなわち 1 文節に保存される例もある。

（19）　min=nu∧ maju∧　「目のマユ（＝眉毛）」

5.2. 形容詞のアクセント

形容詞は，語の内部要素がそれぞれのアクセント（下降型，平進型，上昇型）を持ち，語全体で 2 つのアクセント単位を持つ[13]。この点で，4 節で述べた名詞，動詞のア

[12]（14b）の例は 1 音節目で上昇は起こらず ba は単に高ピッチで実現する。一方で，全体として通常の下降型（例えば有声音始まりの下降型の語 judari「よだれ」など）とピッチパターンが異なる。ゆえに，前部要素の ba のアクセントが保存されていると考える。

[13] これらの語は，各要素のアクセントが保存されるとは言え，形態統語的にはあくまで 1 語

クセントとは異なる。5 節の冒頭で述べた通り, 5.1 節で挙げた複合語の例外(例(14)から（16)）と並行的に考えられる。以下に例を挙げる。

（20）　a.　**下降型＋平進型**
aga↘han↗「赤い」, tusa↘han↗「遠い」, nisja↘han↗「苦い」, baga↘han↗「若い」
b.　**平進型＋平進型（全体として 1 つの平進）**
ma↗han↗「旨い」, taka↗han↗「高い」, isjaga↗han↗「小さい」, misja↗han↗「良い」
c.　**上昇型＋平進型（全体として 1 つの上昇）**
maro↗han↗「低い」, bjo↗han↗「痒い」, wasa↗han↗「悪い」, karo↗han↗「軽い」

2 節で述べた先行研究のうち，平山ほか（1967）および平山（1988）では形容詞のアクセントについても述べられている。これらの先行研究においては（20a）と（20c）のようなピッチパターンが報告されているが，全体で 1 つのアクセント単位であると考えられている。ここでは，（20）を例にとり，なぜ本稿では 2 つのアクセント単位を持つと分析するか述べる。

仮に 1 つのアクセント単位だとすると，（20a）は語頭でピッチが下降し，語末に向けて再び上昇するというパターンを示すため，4.3 節で述べた上昇型のピッチパターンの一種と解釈される。しかし，この分析は妥当ではない。なぜなら（20a）の語は, 語頭に下降がない(20c)のようなピッチパターンが観察されないからである。

さらに，複合名詞のように「前部要素 aga ＋後部要素 han」で 1 つのアクセント単位とする分析するのが妥当であるなら，前部要素は「上昇型」のアクセント型を持つはずである。しかし実際には，agahan「赤い」を例にとると，前部要素 aga は，上昇型ではなく，下降型アクセントを持っている。それは，aga 単独では発話されないものの，agabata「赤旗」，agapana「赤花」，agamisju「赤味噌」，agadeguni「赤大根（＝人参)」といった語が見つかっており，これらすべての語が下降型のアクセントを持っていることから推察される [14]。もし複合語のように 1 つのアクセント単位と分析するなら，全体で「下降型」のピッチパターンを取るはずである。

従って，2 つのアクセント単位として分析し，それぞれの要素のアクセントが実現されていると考えるのが妥当であると考える。上昇型のピッチパターンに類似する（20a）および（20c）では，後部要素 han が必ず高ピッチで実現する。最終モーラ n のみ高ピッチで実現するトークンが観察されていないこともこの分析の妥当性を後押しするだろう。それゆえ，それぞれ（20a）は「下降型＋平進型」，（20b）は

である。その理由は，①アクセントの境界（例：agahan「赤い」の場合，aga と han の間）に他の形態素が割って入ることがなく，②前部要素単独で語としての機能は果たさないからである。

[14] それぞれ，pata「旗」は下降型，pana「花」は平進型，misju「味噌」および deguni「大根」は上昇型のアクセントを持つ。琉球諸語全体を見渡すと，この類の形態素（aga など）は生産的に複合名詞を形成する（Shimoji 2010)。波照間方言は琉球諸語の他方言と比べて例が極端に少なく，非生産的である。

「平進型＋平進型」，（20c）は「上昇型＋平進型」と分析する。（20c）は，上昇型末尾の高ピッチが平進型の高ピッチと重なっていると分析する。

6. 四型アクセント体系の可能性はあるのか

6.1. 松森（2015a）

波照間方言のアクセントについて，松森（2015a）[15] によって四型アクセント体系（a 型，b 型，c 型，x 型）の可能性が指摘されている（表 3）。それぞれ，.：モーラ境界，]：ピッチ下降，[：ピッチ上昇を意味する。

表 3　松森（2015a: 81）の四型アクセント体系の指摘 [16]

a 型	mja.a.]gu	pi.tu	ga.ra…	（宮古人から～）
	ku.pa.]ma	pi.tu	ga.ra…	（小浜人から～）
b 型	[u.si.na.a	pi.tu	ga.ra…	（沖縄人から～）
c 型	ta.ru.ma]	pi.tu	ga.ra…	（多良間人から～）
	ta.ki.du.n]	pi.tu	ga.ra…	（竹富人から～）
x 型	ja.]ma.tu	pi.tu	ga.[ra…	（大和人から～）

松森（2015a: 81）は「その下がり目の有無と位置の違いによって」4 種類の型を区別した。本稿との対応で言うと，a 型が「下降型＋下降型」の複合語，b 型と c 型が「平進型＋下降型」の複合語，x 型が「上昇型＋下降型」の複合語にそれぞれ対応している。つまり，松森（2015a）は b 型および c 型という，2 つの「平進型＋下降型」の複合語を指摘した。ただし，松森（2015a）では名詞単独で 4 種類の区別が明確であるという報告はなされていない。

6.2. 追加調査

松森（2015a）の指摘に関して，仮に四型アクセント体系であった場合には，語単独の場合は平進型だが，複合語や助詞が後続した場合に異なる 2 つの平進型が存在するのではないかと考えた。そこで，2 つの平進型アクセントの存在を確かめるべく，追加調査を行った。対象となる平進型のアクセントを持つ名詞，usīna「沖縄」および takidun ～ takidu「竹富」に対して以下の調査を行った：

① pītu「人」を付加する複合語の調査
②下降型のアクセントを持つ到格助詞 bagi を付加する調査
③アクセントを持たない属格助詞 =nu を付加する調査
④アクセントを持たない 4 モーラ助詞「奪格助詞 =gara ＋焦点助詞 =ndu」を付加

[15] 本稿と松森（2015a）の話者は別人だが，波照間島の中でも同じ地区に住む話者である。
[16] 松森（2015a: 81）の（54）波照間方言の四型アクセント（複合語から始まる韻律句その 4）に関して，モーラ境界に誤植と思われる箇所がある（[a 型] の ku.pa.]ma pi.tu gar.a）。本文中では訂正した上で引用した。

する調査

これらの調査では，対象となる名詞と複合語を作る後部要素に pïtu「人」以外に共通する語を見つけられなかった。そのため，②から④はアクセントを持つ助詞とアクセントを持たない助詞で調査を行った。その結果，（21）に挙げるように，追加調査①では以下の結果が得られた。

（21）　b 型　　usïna ＋ pïtu˥「沖縄人」
　　c 型　　takidu˥ ＋ pïtu˩˧「竹富人」

松森（2015a: 81）と異なる点は，pïtu「人」のアクセントの下降位置である。松森に倣ってアクセントを記述するとすれば，（21）の c 型は takidu pï]tu である。（21）の c 型の場合，複合語であっても名詞単独であっても pïtu「人」のピッチパターンは変わらない。以下，図 6 および図 7 に（21）c 型と pïtu「人」単独の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを示す。

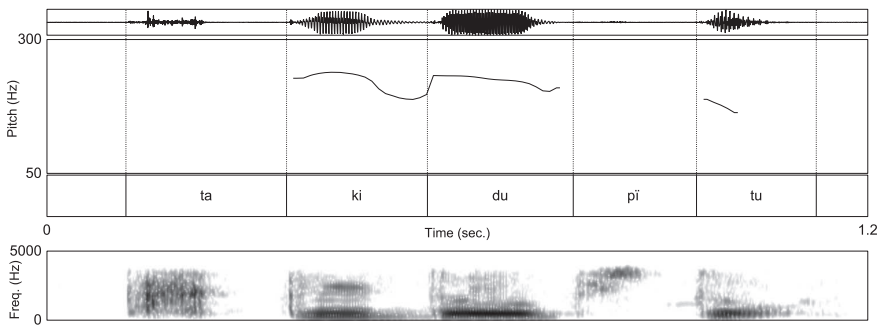

図 6　（21）c 型 takidu+pïtu「竹富人」

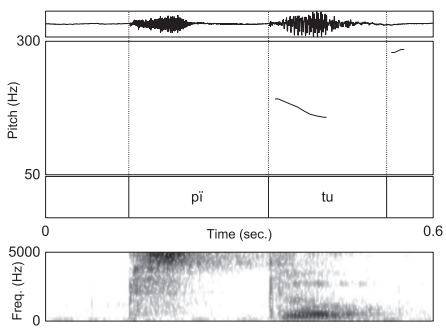

図 7　pïtu「人」

（21）は下降位置の分析が異なるものの，b 型と c 型の違いが出るという点では松森の主張と合致する。しかし，この例以外で一般に b 型と c 型の違いが出るような組み合わせを見出すことはできなかった。以下の（22）から（24）は，それぞれ追加調査②から④に対応する。

（22）　b 型　usïna˥ bagi˩˧ ngun˩˧「沖縄まで行く」
　　c 型　takidun˥ bagi˩˧ ngun˩˧「竹富まで行く」
（23）　b 型　usïna=nu˥ muni˧˩「沖縄の言葉」
　　c 型　takidun=nu˥ muni˧˩「竹富の言葉」
（24）　b 型　usïna=gara=ndu˥ kjaro˩˧「沖縄から来たよ」
　　c 型　takidun=gara=ndu˥ kjaro˩˧「竹富から来たよ」

（22）では，追加調査①の複合語の調査に似せて，対象となる平進型のアクセントを持つ名詞に下降型の助詞を付加し，違いが出るか調査した。結果，b 型においても下降型の助詞（bagi）は下降型で実現したため，b 型と c 型に違いは見出せなかった。（23）は，文節の長さを変えた調査である。対象となる名詞にアクセントを持たない助詞を付加し，違いが出るか調査した。結果，文節全体は平進型で実現したため，b 型と c 型に違いは見出せなかった。（24）は，（23）の結果を受け，さらに長い文節にした場合に違いが出るか調査した[17]。アクセントを持たない 4 モーラ助詞を，対象となる名詞に付加した。結果は（23）と同様に，文節の長さが増えても文節全体はどちらも平進型で実現し，違いは見出せなかった。以下，図 8 および図 9 に（24）の音声波形・F0 曲線・スペクトログラムを示す。

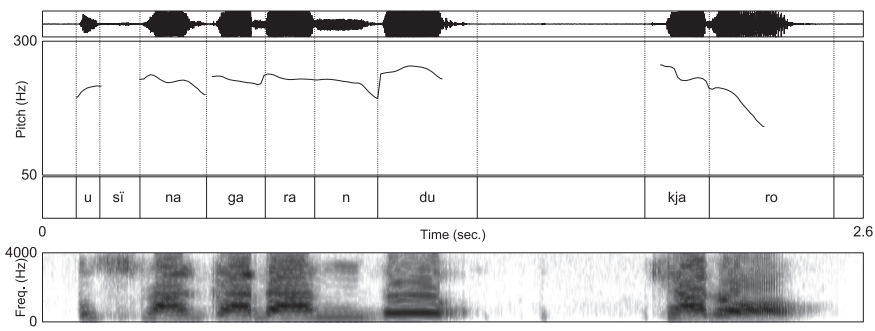

図 8　（24）b 型　usïna=gara=ndu˥ kjaro˩˧「沖縄から来たよ」

[17] この調査方法は，八重山語黒島方言（松森 2015b）でアクセント型の対立が明らかになった方法である。

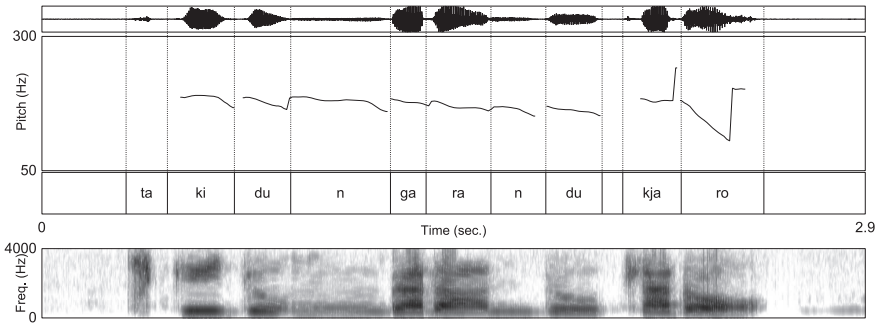

図 9　（24）c 型　takidun=gara=ndu˥ kjaro˩˨「竹富から来たよ」

このため，本稿では松森（2015a: 81）および（21）の c 型の例を，5.1 節の（14）から（16）で例外として扱った例のように，複合語のそれぞれの要素のアクセントが実現した例であると分析する。この例に関しては，（14）から（16）に挙げた例と同様に，後部要素すなわち pïtu が下降型のアクセントを持つことは注目すべきである。ただし，（24）の b 型と c 型の例文を聴き比べると，平進型であるものの，b 型に比べ c 型のピッチが相対的に低いのがやや気になる。これについてはさらに調査が必要である。

7. 共時的アクセントからの通時的考察

7.1. 系列別語彙と語頭音に基づくアクセント型の予測

2 節の最後で述べた通り，本稿と 1980 年代までの調査結果に基づく先行研究との違いは，表 1 でアクセント型 2 のピッチパターンとされてきた LH と HH（崎村 1987 では LL）をそれぞれ別のアクセント型，すなわち平進型と上昇型に分け，波照間方言は三型アクセント体系であると分析する点にある。本稿がこのような分析をした最大の理由は，ミニマルトリプレットが見つかっているからである。また，上述した先行研究では，おおよそ類別語彙 2 拍名詞の 1, 2 類（A 系列に相当）と 3, 4，5 類（BC 系列に相当）が別々のアクセント型に所属するという予測が述べられているが，3 つのアクセント型に区別する本稿の立場をとっても，系列別語彙（松森 2010 など）に加えて語頭音の情報を考慮することで，各アクセント型に所属する語彙をかなり精密に予測することができる。とりわけ語頭音に関する情報はこれまで報告されていないものであり，後述する歴史的な変化とも関連すると考えられる。

表 4 にこれまでに見つかったミニマルペアの例を挙げた。例えば，/ki/ という音素配列の語においては，/ki˩˨/「毛」と /ki˥/「木」のペアがあり，/ju/ という音素配列の語では /ju˩˨/「魚」と /ju˧/「湯」のペアがあるという具合である。

表 4　波照間方言におけるミニマルペアの分布

音素配列	下降型	平進型	上昇型
/pana/	/panaꜿ/「鼻」	/panaꜾ/「花」	未発見
/pïn/	/pïnꜿ/「日」	/pïnꜾ/「屁」	未発見
/pi/	/piꜿ/「女性器」	/piꜾ/「火」	未発見
/pe/	/peꜿ/「ハエ」	/peꜾ/「南」	未発見
/kacï/	/kacïꜿ/「風」	/kacïꜾ/「うに」	未発見
/ki/	/kiꜿ/「毛」	/kiꜾ/「木」	未発見
/ke/	/keꜿ/「井戸」	/keꜾ/「卵」	未発見
/fa/	/faꜿ/「鞍」	/faꜾ/「蔵」	未発見
/simi/	/simiꜿ/「爪」	/simiꜾ/「包んで」	未発見
/sunu/	/sunuꜿ/「昨日」	/sunuꜾ/「着物」	未発見
/sumu/	/sumuꜿ/「下」	/sumuꜾ/「肝」	未発見
/usï/	/usïꜿ/「牛」	/usïꜾ/「臼」	未発見
/zïn/	/zïnꜿ/「お盆」	未発見	/zïnꜽ/「銭」
/me/	/meꜿ/「米」	未発見	/meꜽ/「前」
/nan/	/nanꜿ/「名前」	未発見	/nanꜽ/「波」
/ju/	/juꜿ/「魚」	未発見	/juꜽ/「湯」
系列別語彙：	**A**	**B と C が混在**	
語頭音：	**制限なし**	**無声音か母音**	**有声音**

表 4 を見ると，平進型と上昇型において系列別語彙に基づく区分が無く，その代わりに語頭子音の有声／無声に従ってアクセント型が偏っていることがわかる。母音始まりの語は，語頭子音が無声の場合と同じ振る舞いをすると記述できる[18]。もちろん，ミニマルトリプレットがあることからわかるように，完全に相補分布しているわけではないが，下降型と平進型，あるいは下降型と上昇型のミニマルペアが多数存在するのに対し，平進型と上昇型のミニマルペアは非常に少ない[19]。現時点では 1 ペア（/munꜾ/「思う」vs. /munꜽ/「麦」）だけしか見つかっていない。ミニマルトリプレットについても表 2 で挙げた 2 語しか見つかっていない。

これらの事実から，系列別語彙と語頭音の情報に基づいて波照間方言のアクセントの歴史的変化を推定すると，大きく 2 つの可能性があるように思われる。次節以降（7.2 節，7.3 節）でそれぞれの可能性（仮説）について述べる。

[18] 一般に母音は有声であることから，有声か無声ということを重視するのであれば，母音で始まる語は有声子音で始まる語と同じ振る舞いをしそうである。しかし，そうなってはいない。これは，母音で始まる語において母音の直前に（少なくとも音声的に）*[ʔ] が存在したことが，無声子音で始まる語と母音で始まる語の振る舞いが同じになった理由だと考えられる。

[19] 少ないながらもミニマルペアがあるので，共時的に平進型と上昇型を完全に同じアクセント型（たとえば“非”下降型）とみなして，語頭音の違いでピッチパターンの表われ方が異なるだけだとする考え方はとらない。

7.2. 仮説 1：アクセント型の数が減少した後に増加した可能性

系列別語彙の考え方に従い，祖方言に三型アクセント体系を設定し，現在の波照間方言において系列別語彙の B 系列と C 系列が合流しているという事実からシンプルに考えると，一度 B 系列と C 系列の語彙が合流した時代があったという仮説が成り立つ。図示すると以下の図 10 の通りである。

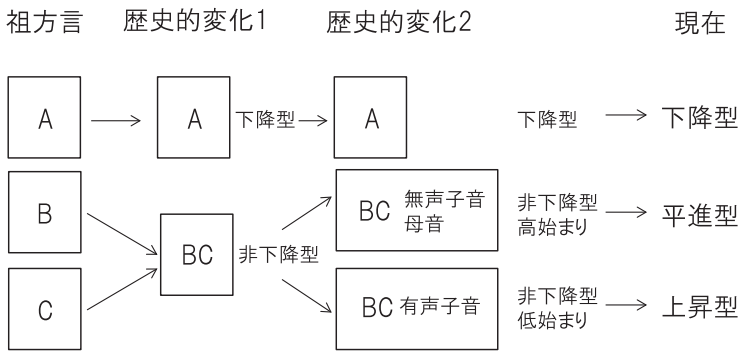

図 10　仮説 1

この仮説では，現在に至る流れの中で，図中の「歴史的変化 1」に示す通り，系列別語彙の B 系列と C 系列が 1 つのアクセント型を構成していた時代を想定する。この「歴史的変化 1」の時点におけるアクセント型については，現在の平進型と上昇型の共通特徴を考慮し，かつ，系列別語彙 A が構成していたアクセント型（現在の下降型に対応）と対立するということから，“非下降”の特徴を持ったアクセント型であると推定する。

その後，語頭音の性質に基づき変化が起きて，無声子音（または母音）で始まる語は語頭のピッチが比較的高く始まる型（平進型）となり，有声子音で始まる語は語頭のピッチが比較的低く始まる型（上昇型）となって現在に至ると考える。つまり，この仮説は通時的にアクセント型が減ったあとに増えたという説である [20]。

7.3. 仮説 2：アクセント型の数が変わっていない可能性

一方，変化の過程で必ずしも二型アクセント体系を経る必然性はない。祖方言に三型アクセント体系を設定し，語頭音の性質に基づいて少しずつ語彙が偏って（移動して）いき，祖方言とは所属語彙が異なる現在の三型になったという仮説も立つ。図示すると図 11 のようになる。

[20] 五十嵐ほか（2012: 146）の注 1 で，八重山西表島の祖納方言について，アクセント型が一度合流した後に分岐した可能性，すなわち新たな型の区別が生じた可能性が指摘されている。ただしその詳細は明らかにされていない。

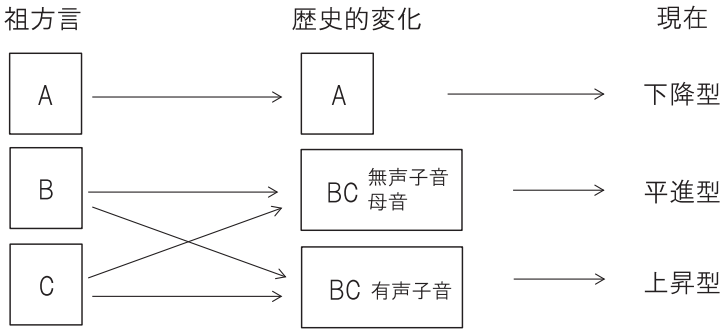

図 11　仮説 2

この仮説では，変化している段階でも三型のアクセント型を保つ。この仮説のように，アクセント型の数を維持しながら音声的な特徴に基づいて所属語彙が変わっていったと推定される方言の例として，加賀地方の方言（新田 1985）が報告されている。

この仮説は「アクセント型の数が変わっていない」という説ではあるが，もう少し詳しく考えてみると，三型のうちで平進型と上昇型の違い（＝下降型では“ない”アクセント型のピッチパターンの違い）が語頭音に基づいて予測でき，音韻的には平進型と上昇型が同じ型と言えるような体系に近づいているということである。すなわち，実質的に「アクセント型の数が 3 つ（三型アクセント体系）から 2 つ（二型アクセント体系）に減っていく途中」の段階にあると主張する説ということになる。

仮説 1 か仮説 2 のいずれかの説に決まる決定的な証拠は今のところ無いと考える。今後さらなる研究が必要だろう [21]。

7.4. 白保方言との対応から変化時期を推定する

この波照間方言に見られる語頭音に基づく型の区別というのが，いつごろ起きた変化であるかということを推定する上で重要なのは白保方言である。白保方言は，沖縄県石垣市白保（石垣島）で話されている。白保は 1771 年に八重山で起こった大津波でほとんどの人口を失ったものの，その直後に波照間島からおよそ 400 人の強制移住（アウエハント 2004）により再建されたという経緯がある [22]。白保方言の

[21] 査読者から「仮説 1 だと，B と C 系列の歴史的な区別が一旦完全になくなるから，例外の分布は祖方言の体系に由来せずに，偏りがないはずである。仮説 1, 2 から予測される状況（現状）には違いがある。」という旨のコメントを頂いた。論理的にはあり得ることだと思うが，現在の例外の分布がどちらの状況なのか，すなわち祖方言の体系に由来していない（＝偏ってない）状況なのか，祖方言の音調を維持している（＝偏った）状況なのかを判断することが今すぐには難しいと思われる。将来的には，例えば別の独立した証拠から「（仮説 1，2 の）祖方言」の特徴を導き出し，それと合わせて考えることで判断可能かもしれない。

[22] 津波以前の 1713 年にも白保へ 300 人程度の移住があったといわれている（アウエハント 2004）。

アクセントについては中川ほか（2015: 15）において以下のように述べられている。該当部分を引用する[23]。なお，引用した箇所の最初にある「この方言」とは白保方言を指す。

この方言では（67）に示すようなアクセントの区別がある。

（67）　a.　[pi:]˥　　/pii/「火」
　　b.　[pi:]˩˥　　/pii/「日」

Ogawa and Aso（2012）は，波照間方言におけるアクセント型を 3 種類認めているが，白保方言ではこのうち，平板型（67-a）と下降型（67-b）のみが見つかっており，上昇型は認められない。波照間方言には（68）のような上昇型の語があるが，このうち，（68-a）「銭」や（68-b）「波」は白保方言では下降型になっている。「前」は, /me-nte/「前 - 側」と言うことが普通であり,「名前」は /naa/ と言うことから，アクセントの型が 1 つ減ったことによる語の曖昧さの回避策として，別の形式を用いていることが示唆される。

（68）　波照間方言
　　a.　[dʑɨɴ]˩˧「銭」　vs.　[dʑɨɴ]˩˥「お盆」
　　b.　[naɴ]˩˧「波」　vs.　[naɴ]˩˥「名前」
　　c.　[me:]˩˧「前」　vs.　[me:]˩˥「米」　(Ogawa and Aso 2012)

中川ほか（2015: 15）

ここでなされている指摘，すなわち波照間方言で上昇型の語が白保方言では下降型になっているという指摘が正しいとすると，本稿で述べた表 4 の「波照間方言におけるミニマルペアの分布」から，両方言におけるアクセントの対応関係は以下の図 12 のようになると予測される。系列別語彙および語頭音の情報とともに記す。なお，アクセント型の名称については次のような記号で整理する。波照間方言の下降型，平進型，上昇型をそれぞれ，ʜFalling，ʜLevel，ʜRising，とし，白保方言の下降型，平板型をそれぞれ，sFalling，sLevel とする[24]。

[23] 引用にあたり，日本語訳の表示方法などを本稿に合わせ変更した。
[24] ここでは，それぞれ ʜ：Hateruma，s：Shiraho を意味する。

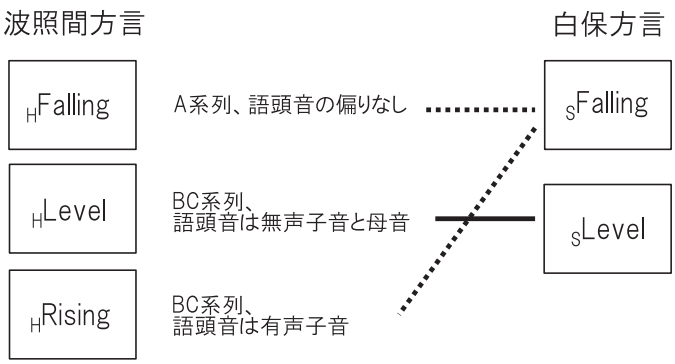

図 12　波照間方言と白保方言の共時的なアクセント対応

このアクセント型の対応からは，白保方言の共時的アクセント体系において sLevel が無声子音および母音で始まる BC 系列の語から構成されているという予測が成り立つ。この予測を確かめるために，中川奈津子氏より提供して頂いた白保方言の音声データを分析した[25]。その結果，予測どおりであったので報告する。本稿の最後につけた資料 1 ～ 5 を参照して頂きたい。資料 1 ～ 3 には波照間方言と白保方言の間で語形が対応していて，かつ現時点で両方言のアクセントがわかっている語を掲載した。資料 1 には波照間方言で下降型の語を，資料 2 には平進型の語を，資料 3 には上昇型の語を，それぞれ白保方言と対照して掲載した。一方，資料 4 には白保方言における下降型の語を，資料 5 には平進型の語をそれぞれ一覧で示した。資料 4，5 には資料 1 ～ 3 に掲載されていない語も含まれている。

まず，アクセント型の対応について中川ほか（2015: 15）の指摘が正しいことが確認できる。資料 1 から 3 のいずれにおいても 8 割以上の語が予測どおりのアクセント型の対応を示す。HFalling と HRising が sFalling に対応し，HLevel が sLevel に対応しているのである。次に，「sLevel が無声子音か母音で始まる語で構成されている」という，本稿で新たに注目する語頭音の予測に関して，資料 5 に掲載した 50 語の語頭音の比率は以下（25）のようになる。

（25）　sLevel**（白保方言の平板型の語）における語頭音の比率**

有声子音	無声子音＋母音	合計
7（14%）	30+13=43（86%）	50（100%）

無声子音と母音を合わせた比率は 86% である。資料 4 の sFalling における同様

[25] 白保方言のアクセントの聞き取りおよびアクセント型の判断については，本稿の著者らが音声を聞きなおした上で判断した。表記は比較しやすいよう波照間方言で採用しているものを用いている。

の比率が，以下の（26）で示すように 50% 程度であることと比較すると，いかに sLevel の語頭音が偏っているかがわかる。

（26）　sFalling**（白保方言の下降型の語）における語頭音の比率**

有声子音	無声子音＋母音	合計
31（48%）	25+9=32（52%）	65（100%）

系列別語彙の予測についても資料 5 からわかるように，sLevel の語においてはほとんどの語が B 系列か C 系列である。なお，全資料の系列別語彙の情報は原則として五十嵐（2015, 2016a, 2016b）のリストによった。このリストは松森（2012）で不足している南琉球方言の情報も加味して作成されている系列別語彙のリストである。

以上から，波照間方言のみならず白保方言にも特定のアクセント型に所属する語彙に語頭音の偏りが見られることが明らかになった。波照間方言と白保方言が共通の祖方言から分かれたのが史実から明らかであることを考えると，八重山祖語から分かれた後の波照間・白保に共通の祖方言（おそらく三型アクセント体系を持つ）の段階で，現在の波照間方言のような語頭音に基づく型の区別が出来上がっていたと考えるのが妥当であろう。すなわち，先に示した波照間方言の通時的な変化に関する仮説 2 つに関して，波照間方言と白保方言の分岐の時期を考慮すると，図 10 の「歴史的変化 2」および図 11 の「歴史的変化」はいずれも「250 年以上前の波照間・白保の祖方言」と言い換えられる。また，語頭音の違いによるアクセント変化の時期は，（現在，有声子音始まりの語だが平進型アクセントである）「思う」や「乳」が波照間・白保に共通の祖方言の段階で，それぞれ *umun > mun，*cï > zï のような変化を起こす前，すなわち，語頭に有声子音を持たなかった語が，語頭に有声子音を持つようになる変化を起こす前であったと推定される [26]。

波照間方言と白保方言の共時的アクセント型の対応がどのように成立したかも考えるべきテーマである。仮に，波照間方言のアクセント体系が今と 250 年前で大きく変わっていないのであれば, 波照間方言と分かれた後で白保方言の「上昇型」（共時的には存在しないので *sRising）が現在の波照間と同様の語頭隆起を起こし，（あるいは, 波照間・白保の祖方言がそのような語頭の音声的特徴をすでに持っており, ）さらにその語頭での下降が音韻的に重要と捉えられるようになった結果，下降型（sFalling）に組み込まれた，という仮説が立つ。もっとも，この仮説については波照間方言と白保方言の比較を含めてさらなる議論が必要であろうから，本稿では今後の課題として述べるにとどめたい。

[26] Thomas Pellard 氏の指摘による。なお「思う」と「乳」は資料 1 ～ 5 には載っていない語であるが, 査読者のコメントを受けて白保のアクセントを追加調査したところ, 少なくとも「乳」は sLevel であった。上記の推定の傍証になるだろう。

8. 結論

本稿の主張は，まず波照間方言のアクセント体系は三型アクセント体系であるという点，次に形態統語単位（語あるいは文節）と音韻単位（アクセント）が一致しないことがあるという点，最後に語のアクセント型が予測可能である，という 3 点である。

まず，これまで主に二型アクセント体系とされていた波照間方言のアクセント体系について，ミニマルトリプレットを提示し，三型アクセント体系を主張した。波照間方言の三型アクセント体系は「語＋アクセントを持たない助詞」すなわち文節をドメインとし，下降型，平進型，上昇型のアクセント型を持つ。それぞれの弁別特徴は，①語末に向けて下降する，②下降も上昇もしない，③語末に向けて上昇する，の 3 つである。上昇あるいは下降の位置は非弁別的と考えているため，N 型アクセント（上野 1977，2012）でかつ語声調（早田 1977，1999）の言語であると言えるだろう。

次に，1 語（あるいは 1 文節）に対して 1 アクセント単位を基本とするにもかかわらず，語あるいは文節の数とアクセント単位が一対一に対応しないケースがあることを指摘した。形容詞と一部の複合名詞は1語に2アクセント単位を持つ一方で，複数文節に 1 アクセント単位を持つ名詞句の例を見た。このように，形態統語的な単位とアクセントの単位が一対一で対応しないケースが散見するので，四型アクセント体系の可能性が指摘されたのではないだろうか。

最後に，語のアクセント型が，系列別語彙と語頭音に基づいてほぼ予測可能であることを報告した（表 5）。

表 5　系列別語彙と語頭音に基づくアクセント型の予測

	語頭が無声子音あるいは母音	語頭が有声子音
系列 A	**下降型**	
系列 BC	**平進型**	**上昇型**

この点に関して，このような語頭音に基づく型の区別がいつ頃起きたのかについての予測も試みた。同じ祖方言を持つ白保方言と比較した結果，すでに 250 年前から語頭音の違いによるアクセント型の区別が存在したことを明らかにした。

一方で，課題も残っている。まず，共時的な問題としては，1 語が 2 つのアクセントに分かれる場合，逆に複数文節にわたって 1 アクセントが現れている場合について，いつそうなるのか詳細な条件が明らかでない。これらについては，さらなる調査が必要である。次に，通時的な問題としては，本稿で報告したような語頭音とアクセント型が関係を持つ方言，あるいはそのような痕跡をとどめる方言は他にないのかということがある。そのような方言が見つかるかどうかが，八重山の（あるいは南琉球の）諸方言が分かれた時期の議論に影響するものと考える。今後，八重山の諸方言についてアクセント調査をする際には語頭音の違いにも注意を払うこと

が必要であろう。

最後に，これまで見てきたように，波照間方言アクセントの平進型と上昇型は，語頭音が無声子音（あるいは母音）なら高ピッチ，有声子音であれば低ピッチで始まるというような変化，すなわち tonogenesis（アクセント／声調発生）を遂げた。このような子音の有声・無声による tonogenesis は，通言語的に見ると最もよく知られているタイプのものである[27]。特に，東アジアおよび東南アジア地域の諸言語では古くから記述報告があり（Maspero 1912 など），よく知られている例として北方モン・クメール諸語のクム語（Svantesson 1989）が挙げられる。実験音声学的にも Hombert（1978）や Hombert et al.（1979）によって，有声阻害音が引き金となり後続する母音が低ピッチと結びつきやすいことが示されている。

しかし，通言語的に最もよく知られているとはいえ，日本のアクセント研究史においてこのような tonogenesis のタイプは非常に報告が少ない。波照間方言と同様に分節音の有声・無声の違いによる tonogenesis の報告は，これまでに北琉球奄美語佐仁方言（上野 1996，2000）のみで，波照間方言は二例目となる。ここで興味深い点は，本土ではこのような報告がないことである。これが琉球で起こって，本土では起こらない（あるいは起こりにくい）変化なのか，あるいはただの偶然か，今後の研究成果が期待される。

参　考　文　献

秋永一枝（1960）「八重山方言一・二音節名詞のアクセントの傾向」『国語学』41: 121–125.

麻生玲子（2009）「琉球語波照間方言の動詞と助詞の研究」修士論文，東京大学.

Aso, Reiko (2010) Hateruma (Yaeyama Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 189–227.

麻生玲子（2015）「八重山波照間方言の文法スケッチ」狩俣繁久（編）（2015），47–74.

アウエハント，コルネリウス（2004）『波照間：南琉球の島嶼文化における社会＝宗教的諸相』沖縄：榕樹書林.

早田輝洋（1977）「生成アクセント論」大野・柴田（編）（1977），323–360.

早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』東京：大修館書店.

平山輝男（編）（1988）『南琉球の方言基礎語彙』東京：桜楓社.

平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院.

平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』東京：東京堂.

Hombert, Jean-Marie (1978) Consonant type, vowel quality and tone. In: Fromkin, Victoria A. (ed.) *Tone: A linguistic survey*, 77–111. New York: Academic Press.

Hombert, Jean-Marie, John J. Ohala, and William G. Ewan (1979) Phonetic explanations for the development of tones. *Language* 55(1): 37–58.

五十嵐陽介（2015）「拡張系列別語彙—2015 年 11 月暫定版」未公開電子データ.

五十嵐陽介（2016a）「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別語彙」」『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』233–238.

五十嵐陽介（2016b）「日琉語類別語彙（2016 年 7 月 1 日版）」電子データ.

[27] tonogenesis のタイプには，先行する子音の有声性によるものの他，後続する子音によるもの，先行する子音の拡張声門性（spread glottis）・狭窄声門性（constricted glottis）によるもの，母音の長短によるもの，母音の狭めによるもの，母音の前方舌根性（advanced tongue root）によるもの，ストレスとイントネーションによるものなどがある（Svantesson 2001, Kingston 2011）。

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラール，トマ・久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1): 134–148.
狩俣繁久（編）（2015）『琉球諸語 記述文法 I—消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究』沖縄：琉球大学.
金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究—原理と方法』東京：塙書房.
Kingston, John (2011) Tonogenesis. In: van Oostendorp, Marc, Colin J. Ewen, Elizabeth Hume, and Karen Rice (eds.) *The Blackwell companion to phonology*, 2304–2333. Blackwell companions to linguistics series, Vol. 4. Wiley-Blackwell.
久野マリ子（2002）「波照間方言のアクセント体系再考—1, 2 音節名詞について—」『國學院雑誌』103(11): 1–17.
ローレンス，ウエイン（2000）「八重山方言の区画について」石垣繁（編）『宮良當壮記念論集』547–559. 沖縄：宮良當壮生誕百年記念事業期成会.
Maspero, Henri (1912) Études sur la phonétique historique de la language annamite. Les initiales. *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 12: 1–126.
松森晶子（2010）「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」上野善道（編）『日本語研究の 12 章』490–503. 東京：明治書院.
松森晶子（2012）「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16(1): 30–40.
松森晶子（2015a）「南琉球の方言の三型アクセント体系—その韻律単位に関する考察—」『日本女子大学 紀要 文学部』64: 55–92.
松森晶子（2015b）「八重山諸島黒島アクセントの仕組み—その韻律範疇と下がり目の出現条件—」『日本言語学会第 150 回大会予稿集』182–187.
中川奈津子・ラウ，タイラー・田窪行則（2015）「琉球八重山語白保方言の音韻」狩俣繁久（編）（2015），1–21.
中川奈津子・ラウ，タイラー・田窪行則（2016）「八重山語白保方言の文法概説」狩俣繁久（編）『琉球諸語 記述文法 II』1–60. 沖縄：琉球大学.
新田哲夫（1985）「加賀地方における 2 モーラ名詞アクセントの変遷」『国語学』140: 119–103.
Ogawa, Shinji and Reiko Aso (2012) Three-pattern accent system in Hateruma Ryukyuan. Poster presented at the International Workshop on Corpus Linguistics and Endangered Dialects. National Institute for Japanese Language and Linguistics, 11 October 2012.
小川晋史・麻生玲子（2015）「波照間方言の三型アクセント」第 29 回日本音声学会全国大会ワークショップ：三型アクセント研究の現在. 神戸大学，2015 年 10 月 4 日.
沖縄県教育委員会（1975）『波照間の方言—琉球方言緊急調査 第 2 集』，沖縄県文化財調査報告書 第 3 集. 沖縄：沖縄県教育委員会.
大野晋・柴田武（編）（1977）『音韻』，岩波講座日本語第 5 巻. 東京：岩波書店.
パッパラルド，ジュゼッペ（2012）「波照間方言 2 変種の音響音声学的比較」『音声研究』16(1): 6–15.
Pellard, Thomas (2015) The linguistic archaeology of the Ryukyu Islands. In: Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages—History, structure, and use*. Berlin/Boston/Munich: Mouton de Gruyter, 13–37.
崎村弘文（1987）「波照間島方言のアクセント体系」『南海研紀要』8(1): 1–11.
Shimoji, Michinori (2010) Ryukyuan languages: An introduction. In: Shimoji and Pellard (2010), 1–13.
Shimoji, Michinori and Thomas Pellard (eds.) (2010) *An introduction to Ryukyuan languages*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
Svantesson, Jan-Olof (1989) Tonogenesis mechanisms in Northern Mon-Khmer. *Phonetica* 46: 60–79.
Svantesson, Jan-Olof (2001) Tonogenesis in Southeast Asia—Mon-Khmer and beyond. In: Kaji, Shigeki (ed.) *Proceedings of the symposium cross-linguistics studies of tonal phenomena—tonogenesis, Japanese accentology, and other topics*, 45–58. Tokyo: Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
上村幸雄（1992）「琉球列島の言語　総説」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第 4 巻 世界言語編』771–814. 東京：三省堂.
上野善道（1977）「日本語のアクセント」大野・柴田（編）（1977），281–321.

上野善道（1996）「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告―名詞の部―」『琉球の方言』20: 26–57.
上野善道（2000）「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』4(1): 42–54.
上野善道（2010）「琉球与那国方言のアクセント資料（1）」『琉球の方言』34: 1–30.
上野善道（2012）「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44–62.

執筆者連絡先：
麻生玲子
183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
e-mail: asoreiko@gmail.com

［受領日　2015 年 12 月 29 日
最終原稿受理日　2016 年 7 月 29 日］

Abstract

A Three-pattern Accent System in Hateruma Ryukyuan

Reiko Aso
Graduate Student,
Tokyo University of Foreign Studies

Shinji Ogawa
Prefectural University of Kumamoto

In this paper, we discuss the Hateruma Ryukyuan accent system. Although many previous works have claimed that Hateruma has a two-pattern accent system, some recent studies have hypothesized that it has a three- or four-pattern accent system. In the first part of this paper, we will address the synchronic topics. We will substantiate that Hateruma has the three-pattern accent system through F0 pictures. We will also show that adjectives and compound words can have two accents in a single word.

In the latter part of the paper, we will discuss diachronic topics. Based on the *Keiretsubetsu-Goi* (categorized vocabulary) and word-initial phonemes, we found that one can reliably predict a word's accent pattern. This is true of not only Hateruma Ryukyuan but also Shiraho Ryukyuan. By comparing these two languages, we conclude that Hateruma has retained its accent system for more than 250 years.

資料 1（波照間方言で下降型の語）

意味	波照間方言 語形	波照間方言 アクセント	白保方言 語形	白保方言 アクセント	系列	
毛	ki	$_{H}$Falling	kii	$_{S}$Falling	A	アクセント対応　あり
名	na	$_{H}$Falling	naa	$_{S}$Falling	A	
あなた	da	$_{H}$Falling	daa	$_{S}$Falling	A	
灰	pe	$_{H}$Falling	pee	$_{S}$Falling	A	
牛	usï	$_{H}$Falling	usi	$_{S}$Falling	A	
鳥	turi	$_{H}$Falling	turu	$_{S}$Falling	A	
道	micï	$_{H}$Falling	mici	$_{S}$Falling	A	
胸	nicï	$_{H}$Falling	nni	$_{S}$Falling	A	
音	utu	$_{H}$Falling	utu	$_{S}$Falling	A	
人	pïtu	$_{H}$Falling	pïtu	$_{S}$Falling	A	
石	isi	$_{H}$Falling	isi	$_{S}$Falling	A	
煙	kipusï	$_{H}$Falling	kemuri	$_{S}$Falling	A	
尻	sipi	$_{H}$Falling	sipi	$_{S}$Falling	A	
血	zï	$_{H}$Falling	zii	$_{S}$Falling	A	
米	me	$_{H}$Falling	mee	$_{S}$Falling	A	
紙	kapi	$_{H}$Falling	kabi	$_{S}$Falling	A	
蛇	paku	$_{H}$Falling	paku	$_{S}$Falling	A	
魚	ju	$_{H}$Falling	juu	$_{S}$Falling	A	
風	kacï	$_{H}$Falling	kacï	$_{S}$Falling	A	
下	sïta	$_{H}$Falling	sitara	$_{S}$Falling	A	
星	pucu	$_{H}$Falling	puso	$_{S}$Falling	A	
昼	pïsïmari	$_{H}$Falling	piroma	$_{S}$Falling	A	
男	bidumu	$_{H}$Falling	bidumu	$_{S}$Falling	A	
サトウキビ	amasïna	$_{H}$Falling	amisina	$_{S}$Falling	A	
右	neri	$_{H}$Falling	neeri	$_{S}$Falling	A	
あなた達	daima	$_{H}$Falling	demandaa	$_{S}$Falling		
鼻	pana	$_{H}$Falling	pana	$_{S}$Level	A	なし
葉	pa	$_{H}$Falling	pa	$_{S}$Level	A	

※全ての資料の「系列」欄は主に五十嵐（2015）によった。最終原稿の入稿直前で五十嵐（2016a）の最新版である五十嵐（2016b）を一部参照した。斜線が入っている欄は，対応する語彙が五十嵐氏の資料に非掲載（あるいは系列不明）のものである。

斜線とともに記載されているアルファベットは，Thomas Pellard（p.c.）および上野（2010）に基づいて著者らが記した（南琉球）与那国方言の対応語彙の系列である。

資料 2（波照間方言で平進型の語）

意味	波照間方言 語形	波照間方言 アクセント	白保方言 語形	白保方言 アクセント	系列	
木	ki	$_{H}$Level	kii	$_{s}$Level	B	アクセント対応　あり
田	tana	$_{H}$Level	ta	$_{s}$Level	B	
皮	ka	$_{H}$Level	kaa	$_{s}$Level	B	
花	pana	$_{H}$Level	pana	$_{s}$Level	B	
島	sïma	$_{H}$Level	sïma	$_{s}$Level	B	
肝	sumu	$_{H}$Level	sumu	$_{s}$Level	B	
雲	fumon	$_{H}$Level	fumo	$_{s}$Level	B	
鳩	paton	$_{H}$Level	patu	$_{s}$Level	C	
夢	imi	$_{H}$Level	imi	$_{s}$Level	B	
着物	sunu	$_{H}$Level	sunu	$_{s}$Level	B	
汗	asi	$_{H}$Level	asi	$_{s}$Level	B	
雨	ami	$_{H}$Level	ami	$_{s}$Level	B	
油	aba	$_{H}$Level	anda	$_{s}$Level	B	
骨	puni	$_{H}$Level	puni	$_{s}$Level	C	
船	funi	$_{H}$Level	funi	$_{s}$Level	C	
針	pari	$_{H}$Level	pari	$_{s}$Level	C	
声	kui	$_{H}$Level	kui	$_{s}$Level	C	
虱	san	$_{H}$Level	san	$_{s}$Level	C	
畑	pïte	$_{H}$Level	pitegi	$_{s}$Level	C	
頭	amasïkuru	$_{H}$Level	amasïkuru	$_{s}$Level		
髪の毛	amazï	$_{H}$Level	amazi	$_{s}$Level		
顔	muci	$_{H}$Level	mucci	$_{s}$Level	B	
手	si	$_{H}$Level	tii	$_{s}$Level	B	
屁	pin	$_{H}$Level	pi	$_{s}$Level	B	
角	sino	$_{H}$Level	sïnu	$_{s}$Level	B	
馬	nman	$_{H}$Level	nma	$_{s}$Level	B	
犬	inu	$_{H}$Level	in	$_{s}$Level	B	
豚	uwa	$_{H}$Level	uwa	$_{s}$Level	C	
糸	itu	$_{H}$Level	itu	$_{s}$Level	C	
ヤモリ	kutasimi	$_{H}$Level	futasimi	$_{s}$Level		
太陽	sina	$_{H}$Level	sita	$_{s}$Level	C	
袋	fukuru	$_{H}$Level	fukuru	$_{s}$Level	B	
月	sïken	$_{H}$Level	siki	$_{s}$Level	B	
母	aboa	$_{H}$Level	abo	$_{s}$Level	C	
子ども	utama	$_{H}$Level	utama	$_{s}$Level		
ネズミ	ujancju	$_{H}$Level	uencju	$_{s}$Level	C	
砂糖	sata	$_{H}$Level	satta	$_{s}$Level	C	
茶	sa	$_{H}$Level	cja	$_{s}$Level	B	
左	pinari	$_{H}$Level	pitari	$_{s}$Level	C	
穂	pu	$_{H}$Level	puu	$_{s}$Falling	B	なし
鏡	kangan	$_{H}$Level	kangan	$_{s}$Falling	B	
海	ina	$_{H}$Level	inaga	$_{s}$Falling	C	
今日	kju	$_{H}$Level	kjuu	$_{s}$Falling	C	
口	fucï	$_{H}$Level	fuci	$_{s}$Falling	A	
舌	sïta	$_{H}$Level	suta	$_{s}$Falling	B	
歯	pan	$_{H}$Level	pan	$_{s}$Falling	B	
足	pan	$_{H}$Level	pan	$_{s}$Falling	B	
火	pi	$_{H}$Level	pii	$_{s}$Falling	C	
サツマイモ	agan	$_{H}$Level	anga	$_{s}$Falling		

資料 3（波照間方言で上昇型の語）

	波照間方言		白保方言		系列	
意味	語形	アクセント	語形	アクセント		
私達	baima	$_{H}$Rising	baima	$_{S}$Falling		アクセント対応　あり
味噌	misju	$_{H}$Rising	miisuu	$_{S}$Falling	B	
根	nin	$_{H}$Rising	nii	$_{S}$Falling	B	
夜	juru	$_{H}$Rising	juuruu	$_{S}$Falling	B	
家	hi	$_{H}$Rising	hii	$_{S}$Falling		
鍋	nabi	$_{H}$Rising	naabii	$_{S}$Falling	C	
涙	nanda	$_{H}$Rising	naada	$_{S}$Falling	B	
のど	nudu	$_{H}$Rising	nuudu	$_{S}$Falling	C	
金	zïn	$_{H}$Rising	zin	$_{S}$Falling	B	
お腹	bata	$_{H}$Rising	batta	$_{S}$Falling	B	
女	midumu	$_{H}$Rising	midumu	$_{S}$Falling		
実	nari	$_{H}$Rising	mii	$_{S}$Falling	B	
芭蕉	basa	$_{H}$Rising	basa	$_{S}$Falling	C	
落花生	zimami	$_{H}$Rising	ziimami	$_{S}$Falling	B	
土	nta	$_{H}$Rising	ntta	$_{S}$Falling	B	
今	mana	$_{H}$Rising	mana	$_{S}$Level	C	なし
湯	ju	$_{H}$Rising	juu	$_{S}$Level	B	
私	ba	$_{H}$Rising	ba	$_{S}$Level	C	
目	min	$_{H}$Rising	mii	$_{S}$Level	B	

資料 4（白保方言の下降型の語）

意味	語形	アクセント	系列	
私達	baima	sFalling		有声子音始まり
芭蕉	basa	sFalling	C	
お腹	batta	sFalling	B	
男	bidumu	sFalling	A	
夫	butu	sFalling	A	
節	buusii	sFalling	B	
あなた	daa	sFalling	C	
あなた達	demandaa	sFalling		
とげ	gii	sFalling	A	
嫁	jumi	sFalling	A	
魚	juu	sFalling	A	
夜	juuruu	sFalling	B	
松	macï	sFalling	C	
米	mee	sFalling	A	
道	mici	sFalling	A	
女	midumu	sFalling		
実	mii	sFalling	B	
味噌	miisuu	sFalling	B	
水	mizï	sFalling	A	
婿	muuguu	sFalling	C	
名	naa	sFalling	A	
鍋	naabii	sFalling	C	
涙	naada	sFalling	B	
右	neeri	sFalling	A	
根	nii	sFalling	B	
胸	nni	sFalling	A	
土	ntta	sFalling	B	
のど	nuudu	sFalling	C	
血	zii	sFalling	A	
落花生	ziimami	sFalling	B	
金	zin	sFalling	B	

意味	語形	アクセント	系列	
口	fuci	sFalling	A	無声子音始まり
家	hii	sFalling		
紙	kabi	sFalling	A	
風	kacï	sFalling	A	
鏡	kangan	sFalling	B	
煙	kemuri	sFalling	A	
毛	kii	sFalling	A	
今日	kjuu	sFalling	C	
蛇	paku	sFalling	A	
歯	pan	sFalling	B	
足	pan	sFalling	B	
灰	pee	sFalling	A	
火	pii	sFalling	C	
昼	piroma	sFalling	A	
星	puso	sFalling	A	
穂	puu	sFalling	B	
人	pïtu	sFalling	A	
尻	sipi	sFalling	A	
下	sitara	sFalling	A	
袖	siti	sFalling	A	
舌	sïta	sFalling	B	
塩	suu	sFalling	B	
竹	taki	sFalling	A	
妻	tun	sFalling	A	
鳥	turu	sFalling	A	
サトウキビ	amisina	sFalling	C	母音始まり
サツマイモ	anga	sFalling		
枝	ida	sFalling	A	
柄	ii	sFalling		
海	inaga	sFalling	C	
石	isi	sFalling	A	
上	ui	sFalling	A	
牛	usi	sFalling	A	
音	utu	sFalling	A	

資料 5（白保方言の平板型の語）

意味	語形	アクセント	系列	
私	ba	$_{s}$Level	~~C~~	有声子音始まり
湯	juu	$_{s}$Level	B	
今	mana	$_{s}$Level	~~C~~	
目	mii	$_{s}$Level	B	
馬	nma	$_{s}$Level	B	
顔	mucci	$_{s}$Level	B	
門	zoo	$_{s}$Level		

意味	語形	アクセント	系列	
袋	fukuru	$_{s}$Level	~~B~~	無声子音始まり
雲	fumo	$_{s}$Level	B	
船	funi	$_{s}$Level	C	
ヤモリ	futasimi	$_{s}$Level		
皮	kaa	$_{s}$Level	B	
雷	kannari	$_{s}$Level	B	
木	kii	$_{s}$Level	B	
声	kui	$_{s}$Level	C	
葉	pa	$_{s}$Level	A	
花	pana	$_{s}$Level	B	
鼻	pana	$_{s}$Level	A	
針	pari	$_{s}$Level	C	
鳩	patu	$_{s}$Level	~~C~~	
屁	pi	$_{s}$Level	B	
左	pitari	$_{s}$Level	~~C~~	
畑	pitegi	$_{s}$Level	C	
骨	puni	$_{s}$Level	C	
虱	san	$_{s}$Level	C	
砂糖	satta	$_{s}$Level	C	
月	siki	$_{s}$Level	B	
太陽	sita	$_{s}$Level	C	
島	sïma	$_{s}$Level	B	
竿	soo	$_{s}$Level	B	
肝	sumu	$_{s}$Level	B	
着物	sunu	$_{s}$Level	B	
角	sïnu	$_{s}$Level	B	
唇	sïpa	$_{s}$Level	B	
田	ta	$_{s}$Level	B	
手	tii	$_{s}$Level	B	
茶	cja	$_{s}$Level	B	
母	abo	$_{s}$Level	~~C~~	母音始まり
頭	amasïkuru	$_{s}$Level		
髪の毛	amazi	$_{s}$Level		
雨	ami	$_{s}$Level	B	
油	anda	$_{s}$Level	B	
汗	asi	$_{s}$Level	B	
父	ija	$_{s}$Level	C	
夢	imi	$_{s}$Level	B	
犬	in	$_{s}$Level	B	
糸	itu	$_{s}$Level	C	
ネズミ	uencju	$_{s}$Level	~~C~~	
子ども	utama	$_{s}$Level		
豚	uwa	$_{s}$Level	C	